

[巻頭言]

基本に戻った組織作りと10年後の到達目標

新潟医療福祉大学学長・新潟医療福祉学会会頭 山 本 正 治

学長マニフェストで公表した「三つの約束」の視点から新潟医療福祉学会の問題と課題を明らかにし、10年後の到達目標に関する私案を提示します。

1. 学長マニフェストにおける「三つの約束」

2010年4月、新潟医療福祉大学学長に就任すると同時に、新潟医療福祉学会会頭を拝命しました。私は学長として、今後2年間のマニフェストを公表しましたが、その中で基本となる考え方を次の「三つの約束」にまとめました。

- 1) 一人一人がQOLを実感できる大学作り
- 2) 基本に戻った教学組織作り
- 3) 面倒見の良い大学を目指した教学組織作り

2. 三つの約束を果たす為の努力

学長として1年が経過しましたが、マニフェスト実現に向けて日々努力しております。

1) 一人一人がQOLを実感できる大学作り

将来計画の策定が完了しました。今後10年間の長期目標、4年間の中期目標を設定し、本学の進むべきゴールを明確にしました。併せて委員会の再編を行い、原則一人一役の委員会活動をお願いしておりますが、皆様方におかれましては、大学人として教育、研究、地域・国際貢献の傍ら、各委員会に参加され、ゴールに向けての夢や希望を日常の活動の中に実現していただきたいと思います。日常活動の中にご自身のQOLを感じていただきたいと思います。

2) 基本に戻った教学組織作り

大学の規模に関する明確な定義があるわけではありませんが、学生総数が3,000～4,000人以下を小規模、10,000人以上を大規模大学とする考え方が多いようです。この間が中規模大学です。本学は現在、小規模大学から中規模大学に移行しつつあります。ちなみに入学人数が800名以下で地方にある大学は生き残りが難しいと言われておりますが、この場合学生総数が3,200人となりますので、小規模大学は生き残りが困難であることを意味します。従って本学はいま、生き残れる大学に変身しつつあります。

本学はこれから中規模大学としての組織作りが必要となります。高橋榮明前学長のご努力により、連携教育が特徴となっておりますが、今後その他の教育・研究機能でも連携教育と同じ水準に引き上げることが重要となります。その為には基本に戻った教学組織作りが必要です。

3) 面倒見の良い大学を目指した教学組織作り

我々が進むべき大学の長期目標を決めました。壮大なゴール設定ですが、一方でこれからは“足元を固める”必要があります。学生数が増加するに伴い、低学力や心身に問題をかかえる学生に対する学習支援組織の強化や、卒業生の生涯にわたる教育研修等が益々必要です。全ての学生及び卒業生が必要なサービスを必要なときに必要なだけ受けられる組織作りをしたいと考えています。この精神を本学の行動目標としてとらえ、“めんどうみのよい大学”を標榜することにしました。

3. 新潟医療福祉学会の問題と課題

さて本学会の問題と課題ですが、学長マニフェストで述べた三つの約束の中の「基本に戻った教学組織作り」の視点から取り上げてみます。

1) 学会の位置づけ

学会は新潟医療福祉大学とは独立した組織であります。しかし大学とは一心同体、運命共同体であると理解することが重要です。活動においても新潟医療福祉大学が中核となり、その上で新潟リハビリテーション病院や他の大学との連携と理解すべきです。学会誌の研究論文の質的向上を期待して、会頭も外部組織から引き入れようとする動きがありましたが、本学会のさらなる発展を考える上で得策ではないと考えます。また学会誌名から「新潟」を外し、全国や世界で通用する名前に代えようとする動きもありましたが、ローカル名に責任を転嫁する考え方は容認できません。

将来の発展を考えた最重要課題は、本学教員や卒業生が“入らないと損をする学会”にしたいと思っています。その為に何をすべきか自ずと明らかです。

2) 学会発表

本学会を学会発表の登竜門として位置づけてはいかがでしょうか。一昨年度の学会発表抄録で「結論 (Conclusion)」が書かれていないことに気が付きました。形式上の単純ミスと思われますが、学会発表の基本を意識した組織作りが必要な一事例であります。

将来の発展を考えた最重要課題は、“聞かない・見ない・触らないと損をする情報及び技術の提供”の場でありたいと考えています。毎年学会長が交代しますが、会長の専門職種に合わせて、その領域における最新の情報と技術を内外の学会員に発信する場であって欲しいと期待しています。

3) 和文誌

投稿数が増えて来ており、うれしい限りです。基本に戻った組織作りとしては、質の向上が今後の課題となります。また新潟リハビリテーション病院や他組織からの投稿増も課題です。特に私の本音としては、県内他大学の学位論文掲載の受け皿となるような権威ある雑誌にして行きたいと考えています。

将来の発展を考えた最重要課題は、和文誌をまずは“教員・大学院生の論文発表の登竜門”とすることです。その為に専門事務職員の常勤を含めて編集体制の確立、論文の体裁の指導、その結果として将来上質の論文を掲載できる雑誌になれると思います。問題発見・問題解決ができる質の高い教育・研究職の人材育成も本学会の役割であります。

4) 英文誌

本学会員が英文で世界に研究論文を発表するための登竜門として活用していただきたいと切望しています。その為にnative speakerが参加した編集体制の構築が必要と考えます。幸いにも昨年から私のこの願いは実現しました。

ところで私の前任大学は（良くも悪くも）講座制であった為に、教授の権威において英文論文のまとめ方を基礎から叩き込まれました。いま思うとパワハラに近い指導でしたが、基本を学ぶことができました。しかし本学のように学科制をとる場合、各教員は独立自尊の状態にありますので、若い時代に英文論文を書くための克己心を養わないと、その後の人生において論文執筆は著しく困難になります。

将来の発展を考えた最重要課題は、“外国（特にアジア、環太平洋諸国）からの論文投稿とエディターの受け入れ”であると思います。具体化するための組織作りと何らかの優遇措置が必要です。

以上述べたことは、本学会発展の為に“基本中の基本”と考えていますが、少し偏見と独断が混じってしまいました。

4. 過去・現在・未来

新潟医療福祉大学、新潟医療福祉学会とも10年を経過しました。過去10年間を総括し、未来を簡単に展望してみます。

1) 過 去

学会活動の“礎”が完成しました。本学会をここまで育てていただいた関係者に敬意を表します。

2) 現 在

学会活動を“基本に戻って見直しする”時代です。研究発表の場が他にあるという単純な理由で、会員自身が本学会への関心を失うと、学会は存続できません。この考え方を許容する学会担当者（特に会頭、担当委員会）の“不作為”（何もしないこと）は極めて危険です。私は前任校でこのことを学習済みです。一方、成功例も見て来ております。名前を敢えて紹介しますが、それは東北大学医学部内の東北ジャーナル刊行会です。The Tohoku Journal of Experimental Medicineを発行しております。本学でも先発校の失敗例や成功例を参考にし、かつ基本に戻って、学会活動を見直しする時期に来ていると思います。

3) 未 来

10年後の到達目標として「英文誌のMEDLINE化」を上げます。MEDLINE化は本学会の将来像を一言で表す包括的総合指標であります。このゴールには、新潟医療福祉大学の教職員を中心とする我々自身の努力なくして到達できません。今から準備する必要があります。新潟医療福祉大学の教職員が中心となって、本学会の「長期目標」、「中期目標」を策定していただく中で検討いただければ幸いです。学内外を問わず全ての会員の方々に、本学会のさらなる発展の具体化についてのご助言やご支援を賜りたくお願い申し上げます。